

栗加均先生を偲ぶ

手嶋 將博

平成 25 年 8 月 1 日、栗加均先生が享年 55 歳という若さで急逝された。道徳教育の研究者・授業実践者としての一層のご活躍が期待されていた矢先のご逝去は、ご本人の無念はもちろんのこと、我々にとってもまことに残念であり、また痛恨の極みである。

栗加先生は、千葉県の中学校数学教諭や、千葉県および流山市の教育委員会の指導主事などを歴任された後、平成 20 年 4 月から、道徳教育、生徒指導、人権教育等の授業・研究を中心に本学で教鞭を執られてきた。また、学校現場での長年の教育経験を生かされて、教員採用関連の業務である論作文ゼミ、教採合宿ゼミの講師などにもご参加いただき、教員志望の学生たちに熱意あふれるご指導を戴いた。

栗加先生の大学での授業は、非常に明瞭闊達で歯切れがよく、授業開始時のあいさつに始まり、常によく通る大きな声でお話（というより学生との意見のやりとり）をされているため、13 号館 4 階の教室で先生が講義をされていると、同じ階の研究室にいても内容が半ば聞き取れるほどであった。そうしたバイタリティ溢れる明快な授業という事もあって、先生への授業・講演依頼は、全国の小中学校での校内研修や研究授業、社会教育施設での講座など、まさしく引きも切らずで、校務の高校の出前授業だけをとってみても、毎年 5 校前後は必ず引き受けられていた。2、3 年前、先生が故郷の新潟県（その時は、佐渡島だったと記憶している）の高校まで出前授業に行かれるということがあって、出張の前日に「ずいぶん遠くに行かれますね。大丈夫ですか？」などとお尋ねしたことがあったが、先生は、あはは！と豪快に笑われて「大丈夫、大丈夫！ 帰りにちょっと、新潟の実家に寄って、親にも顔を見せられますんで、ちょうどいいです」とおっしゃられていたことを覚えている。

先生は、道徳教育の研究の中核として、小中学校における道徳の授業の方法論をひとつひとつ確立するということに最も力を注がれていた。具体的には、実際に授業を行う中で、本当にそれが子どもたちに対して効果が上がる方法なのか、道徳性が高まったのか、道徳的実践力がついたのか、ということを検証し、教師も子どもたちも楽しいと思えるような、やりたくなるような授業を構築するためにはどうすべきなのか、といった課題に関して、理論と実践の両面から研究をされていた。そして、そうした使命感からであろうか、毎年、全国各地の多くの小中学校の校内研修や講演を精力的にこなされていた。

先生の道徳教育の授業には、いわゆる“鉄板”の教材が多数存在していた。本学の授業でもお馴染みの『泣いた赤おに』や、ご本人曰く「お宝」の教材という『カーテンの向こう』などの多岐にわたる道徳教材は、形骸化・画一化した道徳の授業からの脱皮と、共同的な学びを通して、子どもたちが自ら道徳的価値の主体であることを自覚し、一人ひとりの内面に根ざした道徳性を育てることを目指したものであった。「道徳は、わかりやすく言えば、一人ひとりが今日よりも明日、明日より明後日と、良い日になるように、より良く生きていくために、どうしていけばいいかということを考えていくことです。みんながみんな、そのように考えていくことが住みよい世の中になるということで、とても大事なことです」と常々お話になり、学校現場における教育実践者として、また大学における研究者として、まさしく全力で生涯を駆け抜けられた栗加先生のご功績は、これからもけして色褪せることはないだろう。

栗加先生、本当にお疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

(てしま まさひろ 文教大学教育学部教職課程長)